



王国騎士
カレナ

誇り高き騎士として
3度の戦を制し、王国に
栄光をもたらしたカレナは、
幼き頃から剣の道を志し、
人生を国の平和のために
捧げてきた。

しかし栄枯盛衰とはこの世の常。
カレナ率いる王国騎士団は
敵国に敗れてしまう。
騎士団の全滅は国内に広く伝えられ、
人々に絶望を与えた。
この機を境に、騎士団を率いていた
カレナの情報も不明となった。



カレナは敵国兵に
捕虜として捕らえられていた。
戦地で戦う男の中に女が一人。
敵国兵はカレナを殺さず捕らえ、
自国へと連れ帰った。
身を守っていた鎧や衣服は全て剥がれ、
恥部を隠せないよう拘束された。

普段なら一蹴できるような男に
胸や尻を弄ばれ辱めを受けながら
地下牢へと連行されるカレナ。
鎧で隠してきた肉体を晒され、
否が応にも今まで無視してきた
女としての自覚と羞恥心を
掻き立てられた。
地下牢最深部に到着したカレナには、
さらに耐え難い凌辱が待ち構えていた。

豊満に育った肉体を縛り上げられ、
男達のちよと目の高さ
恥部が来るように吊るされる。
騎士として生まれ育ったカレナにとって
雌として男達に好奇の目で見られるのは
初めての体験だった。

視界を奪われ、不安定な体制で
局部を晒される耐えがたい恥辱に
全身が火照るカレナ。
その光景をひとしきり楽しんだ
男達は次に、小瓶に詰められた液体を
手に取った。

乳
1000

その国に古くから伝わる媚薬。
肌に塗布すればたちまち
神経は研ぎ澄まされ、
わずかな刺激でも身悶えるほどの
快楽へと変える劇薬。
男を知らないカレナの身体に、
男達は丁寧に塗るように
この媚薬を塗り込んでいった。

乳首や性器などの性感帯には
念入りに、何度も何度も
媚薬が塗り込まれた。
両の突起を弄ばれる度にカレナは
意図せず甘い声を上げてしまう。
それが不覚にも、男達をより一層
楽しませてしまう原因になった。

一生を剣の道に捧げてきた
カレナには、生まれて初めて味わう
この感覚への対処法はなかった。
男達の思うままに体を弄られ、
そのたびにただただ身悶えし、
情けなく鳴くことしか出来ない。



特に女性器には念入りに、
そして丁寧に媚薬が塗り込まれた。
クリトリスはつまんだり、転がすように、
カレナの反応を楽しみながら。
処女膜は傷つけない様に粘膜を広げられ、
ひだの裏まで指先でじっくりと
なぞるように塗り込まれた。

ん

ぱあ

わい

わい

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん

未だかつて
自分でも触ったことが
無いような場所まで弄られ、
見ず知らずの男に委ねるしかない
情けない体勢のカレナ。
男のその丁寧な手つきがまた、
カレナの心を追い込んだ。



次に男達は
カレナの乳首とクリトリスを縛り上げた。
全身に塗り込まれた媚薬で
ただでさえ敏感になっている上に、
繊細な性感帯に括りつけられた紐によって、
視界を奪われたカレナの意識は、
嫌でも3点の突起物に集中してしまう。


紐の先には重りが取り付けられ、
縛り上げられた突起を引き延ばす。
男の一人がクリトリスに
取り付けられた重りを持ち上げた。



男が重りを手放し
振り子のように振動させ始めた。
その強烈な刺激により、カレナは
人生で初めての絶頂を迎えた。
敵の男達の目の前で
みっともない姿を晒すまいと気張るが、
雌として作られた
自身の身体から与えられる快樂に
抗う余地はなかった。

敏感になったクリトリスへ、
無慈悲に刺激が与えられ続ける。
全体重を天井から吊るされた
ロープに頼るしかないカレナが
身をよじる度、
全身が振り子のように振動し、
さらにその振動で取り付けられた
重りが振動を始めてしまう。

振動を始めた重りが
また乳首とクリトリスを刺激し、
カレナは2度目の絶頂を迎える。
絶頂を迎えたカレナの体は大きく震え、
また重りに振動を与えてしまう。
一度始まった絶頂が次の絶頂を招いてしまう
無限の悪循環に、カレナは囚われてしまった。



薄暗い地下牢の隅で
嬌声を上げ続けるカレナ。
もはや騎士としての誇り高き姿はなく、
天井からぶら下げられた
快樂肉人形と化していた。
男達の気が済むまで、
カレナは自らの力ではこの状態を
抜け出すことは決して出来ない。
気を失えばまた重りを揺らされ、
終わりのない絶頂の渦の中へ
強制的に引き戻される。

女として最も隠したい部分を
さらけ出したまま、
カレナはこの後三日三晩
この責め苦を受け続けた。
しかしこれはまだ、
このあとカレナが受ける恥辱の
ほんの一部に過ぎなかった。





